

特集

ラウンドテーブル2019 ～未来を探る円卓会議～

ベンチャー企業の経営者が“日本の未来”を議論する



経済同友会の「日本の明日を考える研究会」は「ラウンドテーブル2019～未来を探る円卓会議～」を9月9日、東京・品川で開催した。経済同友会の会員に加え、若手ベンチャー企業経営者ら約300人が“日本の未来”について12の分科会を舞台に議論を交わした。

また、クロージングセッションでは、小泉進次郎衆議院議員を迎え、鼎談を行った。

◆ INDEX ◆

開催にあたって

金丸恭文委員長インタビュー 4-5

開会宣言／代表幹事挨拶 6

セッション 分科会 7-9

クロージングセッション 鼎談 10-12

閉会挨拶／記者会見 14

ラウンドテーブル2019 ～未来を探る円卓会議～

インタビュー 開催にあたって

経済同友会会員と非会員のベンチャー企業経営者ら、それぞれ約150人、総勢300人が参加して、経済同友会として初となる「ラウンドテーブル2019～未来を探る円卓会議～」を9月9日に開催した。当日は台風15号の影響により、午前中のプログラムが中止となったが、12の分科会では、「小売・流通」「医療」「金融」「オープンイノベーション」「物流」などの幅広い分野にわたり、日本の未来について議論が展開された。企画・運営を担った「日本の明日を考える研究会」の金丸恭文委員長に、開催までの経緯などを聞いた。

(インタビューは9月27日実施)

金丸 恭文

副代表幹事／日本の明日を考える研究会 委員長
フューチャー 取締役会長兼社長 グループCEO



RT 若手・中堅会員が主体的に活動する 日本の明日を考える研究会

——ラウンドテーブルの企画・運営を担った「日本の明日を考える研究会」についてお話しください。

経済同友会では、多くの若手経営者や起業家の皆さんに参画していただきたいという意向がありました。本会は他の経済団体に比べ多様性はあると思いますが、若手会員は全体構成比において当然少なく、活躍の場はあまり多くはありませんでした。

経済同友会とはどのような経済団体なのかや、入会後に自分が経営者として学びたいこと、やりたいことがあると思うので、そのような若手経営者のニーズを受け止めることができる場として研究会が立ち上がりました。研究会を

通じて、本会の活動を実感してもらいながら、個々の政策委員会などへの活動にも徐々に参画してもらえるように、インキュベーション的な機能を持つ仕組みの研究会にしたいと思いました。立ち上げにあたり、後輩会員に声を掛けて、そこからさらに広げていくという形でメンバーを集め、2016年に「日本の明日を考える研究会」が発足しました。

私は、サポーター、アドバイザー、オーガナイザーのような役割で、副委員長を中心に研究会メンバーが主体的に活動できるよう、まず彼らの意見を聞くところからスタートしました。

RT 質の高いインプットによる学びと ラウンドテーブルによるアウトプット

——今回のラウンドテーブルはどのような経緯により開催されたのでしょうか。

経済同友会は改革を先導し、行動する政策集団を掲げており、アウトプット志向です。ただ、慌ててクオリティーの低い拙速なアウトプットをするより、まずは、勉強したい、知見を深めたいというメンバーの要望がありました。そうしたことを踏まえて、経済同友会の大先輩経営者や研究会のメンバーと同じように若くして地方自治体を牽引されている首長、AIやテクノロジーの分野の有識者らを招いてヒアリングとディスカッションを行う質の高いインプット活動が主体でした。

2年ほどこのような活動をしてきましたが、そろそろアウトプットに取り組もうと議論を重ねた結果、大企業とベンチャー企業が同じ場所に集い、同じ時間を共有し、同じテーマでフラットに議論するこのラウンドテーブルの開催に至りました。



RT 20代の参加者の満足が得られるか 終了後のFacebookなどの反響は上々

——初めての試みであるラウンドテーブルの成果、手応えはいかがでしたか。

開催までの作業は結構大変でした。研究会のメンバーは一国一城の主たちであり、そのメンバーらがラウンドテーブルを開催するとなると、責任も公になります。当然、経営者として本業が忙しい中でベストは尽くしていただきました。しかし、本業の合間でいろいろなタスクを着実に実行していかなければなりません。開催前は心配する声も多々ありました。

また、現在、経済同友会で活動している若い会員よりもさらに若い人たち、20代のベンチャー企業の経営者たちにも参加していただきたかったのですが、彼らに満足してもらえなかろうか、ベンチャー起業家の先輩として、私も含めて研究会のメンバーたちは心配しました。

今回の成果についてはさまざまな意見と議論があるでしょう。しかも台風に見舞われるという想定外な困難もありました。逆境の中でのスタートは新たな試みにはふさわしかったと思います。

鼎談の最中に、私のFacebookに友だちリクエストが届き始めたり、終了後は、メッセージで数多くのコメントが寄せられました。いろいろな声も掛けてもらいましたので、喜んでいただけたのではないかと思います。

また、中には「自分のビジネスをあらためて説明したい」や「資本政策やコーポレートガバナンスについての具体的な悩みを相談したい」との話もあります。

分科会に登壇いただいた経済同友会の幹部の方々からも、うまくいったのではないかと、良かったとの声を寄せていただきました。

RT 日本経済活性化のため、経営者同士の 相互信頼やリスペクトが重要

——ラウンドテーブル開催について金丸委員長が期待されたのはどのようなことでしょうか。

経済界は大企業とベンチャー企業に分かれているのではなく、大企業も、そのルーツをたどれば必ず創業期があり企業として徐々に成長していった過程があります。大企業もそれぞれに若い成長期を経験し、それが何世代も世代交代を繰り返してきた結果、今日があるのですから、どの企業も組織に関しては、本来あまり違いはありません。すでに大企業となってからその企業に入社した人は、そのルーツをあまり知りませんから、会社設立当時のころをすっかり忘れてしまっているところもあるかもしれませんが、今



一度、思い出してほしいと思います。

企業の寿命は永遠ではありません。一方、ベンチャー企業も歳を取らないわけではないので、自分が企業の経営者で創業者であれば、いずれ世代交代しなくてはならない時期がきます。そうしたときに、先輩企業が経てきた歴史を同じように後から歩いていって、先輩企業が100年を経過していたのなら、自分も100年残ってはいじめて同じようなことが理解できるようになり、言えるようになる。こうした気持ちで考えれば、現在の企業規模や歴史にとらわれずに、フラットに議論を交わせます。経営者同士、相互に信頼し、リスペクトすることが重要ではないかと強く思います。

——今後のラウンドテーブル開催についてはいかがですか。

現時点において今後の開催は白紙です。今回のラウンドテーブルは他の事例のフォーマットを参考に開催したため、初開催として底堅い成功であったと思います。しかし、同時に感じていることは、経済同友会ならではのオリジナリティーをもっと追究すべきだったという点です。

10月には関係者らで今回のラウンドテーブルを総括する会合を予定しています。本会ならではのオリジナリティーをどのように構築していくかという点も含めて議論してもらえるのではないかと考えているところです。

今回の企画は正副代表幹事会、幹事会などのプロセスを経ていく中、周囲の期待値も高まってきました。開会に際しての櫻田代表幹事の挨拶にもあったように、ラウンドテーブルは本年度の事業計画に掲げている重要なプロジェクトだと言っていました。運営や集客にあたった「日本の明日を考える研究会」のメンバーにとっては、大いに励みになったと思います。

最後に、開催当日は台風の影響で、会場にお越しいただくのご苦労なされた方も多くいらっしゃったと思います。そのような中、多数の皆さまにご参加いただき、心よりお礼申し上げます。

Opening Session オープニングセッション

開会宣言

副代表幹事 金丸 恭文
日本の明日を考える研究会 委員長
フューチャー 取締役会長兼社長 グループCEO

私が委員長を務める「日本の明日を考える研究会」は、経済同友会にもっと若い方々に参加していただきたい、裾野の広い会にしたいという思いからスタートしたものです。本日お集まりのベンチャー企業の皆さまは30～40代の方が多いようですが、私が入会した20年前は私も皆さまと同じような年齢で、経済同友会の中では比較的若い方でした。もともと経済同友会の創立期は30～40代の経営者が牽引しており、そういう意味でも、私たちの会は若い方々が活躍できる場でなければいけません。

本日はお集まりいただいたベンチャー企業の皆さまのために、参画していただきやすいメニューも用意いたしました。また、本日を契機に今後もさまざまな交流会などを企



画してまいりますので、皆さまとの交流が深まればと願っております。大企業、ベンチャー企業という立場や組織の形態、規模、歴史、伝統などを超えて、日本の未来を語る会にしたいと思います。国際競争の中で、それぞれ責任ある立場にある皆さまが大いに刺激し合い、学び合う場になれば幸いです。皆さまの^{かつたつ}闊達なご議論と心温まる交流を期待して、私の開会宣言とさせていただきます。

代表幹事挨拶

代表幹事 櫻田 謙悟
SOMPOホールディングス グループCEO 取締役 代表執行役社長

ラウンドテーブル2019は、今年度の活動の一丁目一番地ともいえる重要なプロジェクト

私はこの4月に代表幹事に就任させていただきました。就任にあたって、代表幹事として何を成し遂げたいのかを一言で言えないかと思案しました。そして、小林喜光前代表幹事にもご了解いただいて掲げたのが、世界から見て「いて欲しい国、いなくては困る国、日本」の実現です。

今、世界ではグローバリズムのダークサイドが跋扈しています。そういったものに対するソリューションを提供できるのは、もしかしたら日本だけかもしれません。日本企業が持つ技術、リアルデータ、国民皆保険という稀有な制度、ガラパゴス・クールあるいはジャパン・クールといわれるソフトパワー、こうしたものが重ね合わさって日本がつけられています。「この日本の姿がこれからの世界のソリューションモデルです」と、日本が世界に示すお手伝いができればとの思いから、「いて欲しい国、いなくては困る国、日本」の実現を目指したいと考えました。

本日のラウンドテーブルは、本会にとって一丁目一番地ともいえる重要なプロジェクトです。この夏に軽井沢で開催した夏季セミナーでの議論では、大企業とベンチャー企業とのコラボレーションについて、コラボレーションすべきだと決めつけるのではなく、「生産性を上げるため、イノベーションを起こすために必要なのは、何をコラボレーションするのかから議論すべきではないか」という指摘がありました。一方、ベンチャーの皆さんからは、「大企業はそも



そもリスクを取らないのではないか」という指摘がありました。

それに対して、「昔からリスクを取らない文化ではない。そうでなければ明治維新は起きなかったはずだ。本田宗一郎氏や井深大氏も活躍しなかったはずだ」という指摘もありました。すなわちイノベーションと危機感とは同時並行で起きるものであり、今の日本に足りないのは危機感です。したがってベンチャー企業の皆さんが持つ不満、危機感、エネルギー、パッションと、大企業が持つ危機感と資本と人材をコラボレーションすることで、良いものが生まれてくるならば、自ずとその方向に進むはずだというのが議論のまとめでした。

本日のセッションはそれを確認する場です。大企業とベンチャー企業は本当にコラボレーションする必要があるのか。必要があるとしたらなぜなのか。そのためにはどこが足りないのか。それを本日参加された経営者の皆さんに議論していただきたいと思います。私たちは、Think Tank機能として本日の議論をできるだけ外に向かって発信するだけでなく、100の提言より3つの実現を目指すDo Tank機能を一層強化し、行動する同友会としての歩みを進めていきたいと思っています。

Session 分科会 産業の未来2

分科会 2 - A

テーマ 小売・流通の未来

eコマースの進化により小売・流通の世界は激変している。急成長を遂げてきた楽天やメルカリは、どのような考えの下、国内外においてビジネス展開をしようとしているのか。一方で既成企業はどう対応しているのか。社内のシステムや意思決定プロセスはどうなっているのか。それを大企業はどう見るのか。大企業とベンチャー企業の接点を探りつつ、活発に意見が交わされた。

パネリスト



北川 拓也
楽天 常務執行役員 CDO
グローバルデータ統括部ディレクター



小泉 文明
メルカリ
取締役社長兼COO



玉塚 元一
デジタルハーツホールディングス
取締役社長CEO

モデレーター



吉松 徹郎
アイスタイル
取締役社長兼CEO



分科会 2 - B

テーマ 物流の未来(シェアリングエコノミー)

9年後には28万人のドライバーが不足するといわれる物流業界。eコマースの進展によって今後も増加が予測される需要にどう対応していくのかなどを、物流イノベーター企業が語り合った。大企業とベンチャー企業による協業や、シェアリングエコノミーがもたらす可能性、規制緩和とセーフティネットのあり方を議論した。

モデレーター



須田 将啓
エニグモ
取締役 最高経営責任者

パネリスト



松本 恭博
ラクスル
取締役社長CEO



山内 雅喜
ヤマトホールディングス
取締役会長



分科会 2 - C

テーマ 食・農業の未来

「10年後のありたい姿」を盛り込んだ自己紹介からスタート。食と健康との関わり、医療との連携、サステイナブルな農業など、冒頭に会場から「気になること」が複数挙がり、関心の高さがうかがえた。「日本とシリコンバレーの一番の差分がフードテックの数」など、米国をはじめ海外の潮流を交えながら、日本の農と食品業界の未来について、本音の議論が交わされた。

パネリスト



小林 晋也
ファームノートホールディングス
代表取締役



橋本 舜
ベースフード
取締役社長



茂木 修
キックマン
取締役常務執行役員



高島 宏平
オイシックス・ラ・大地
取締役社長

モデレーター

分科会 2 - D

テーマ 金融の未来①(フィンテック)

既存の金融機関と金融へ新規参入した企業、立場の違うパネリストの方々から、直近の各社の取り組みの紹介から始まった。ペイメントシステムの急速な広まりと、到来する社会の姿にも話は及んだ。各社の強みを軸とし、必要なところは提携しながら社会全体で金融の将来をつくっていく可能性についても、議論が進んだ。



モデレーター



辻 庸介
マネーフォワード
取締役社長CEO

パネリスト



小澤 隆生
ヤフー 取締役専務執行役員 コマースカンパニー
長 コマースカンパニー ショッピング統括本部長



東 和浩
リそなホールディングス
取締役兼代表執行役社長



舩田 淳
LINE
取締役CSMO

Session 分科会 産業の未来3

分科会 3 - A

テーマ 医療の未来

経済同友会でも、社会保障制度改革は継続的に議論されている。しかし、なぜ抜本的改革がなされないのか。イノベーションが起こるとしたらどのような形が想定され、そこで大企業、ベンチャー企業はどのような役割を果たせるのだろうか。患者、病院、企業、それぞれに利のある持続可能な医療のあり方を探るセッションとなった。

モデレーター



山岸 広太郎

慶應イノベーション・イニシアティブ
取締役社長

パネリスト



岩崎 真人

武田薬品工業 取締役 ジャパンファーマ
ビジネスユニット プレジデント



豊田 剛一郎

メドレー
代表取締役医師



分科会 3 - B

テーマ オフィスの未来

バブル崩壊後、オフィス市場は3回の大量供給があり、現在も都市部を中心に好調な稼働率を維持している。近年は企業に所属していても「毎日出勤する」必要がないケースもあり、働き方はかなり多様化してきている。シェアオフィス、コワーキングスペースなど新しい形が普及してきた。未来のオフィスはどうなっていくのか。自社のオフィス活用アイデアやデジタルとの付き合い方なども含め議論が交わされた。



モデレーター



井上 高志

LIFULL
取締役社長

パネリスト



河野 貴輝

ティーケーピー
取締役社長



伊達 美和子

森トラスト
取締役社長

分科会 3 - C

テーマ 金融の未来②(証券・運用)

株式投資が与える影響について、それぞれの持論や取り組みの紹介から始まり、日本企業の現状評価や課題を議論、続いて非公開株に話題はシフト。ユニコーン現象と日本でのベンチャー投資の現状について、事例や体験が語られた。「お金がお金を生む」ための方策や、事業成長を支える資金の役割についても、意見が交わされた。

パネリスト



赤池 敦史

シーヴィーシー・アジア・パシフィック・ジャパン
取締役社長 パートナー



柴山 和久

ウェルスナビ
取締役 CEO



田代 桂子

大和証券グループ本社
取締役 兼 執行役員 副社長

モデレーター



渋澤 健

シブサワ・アンド・カンパニー
代表取締役



分科会 3 - D

テーマ コンテンツの未来

コンテンツにおいてもガラパゴスといわれる日本。少子高齢化で市場がシュリンクしていく現実に対して業界はどう向き合うのかから議論はスタート。生き残りをかけた世界戦略や、コンテンツビジネスのデジタルトランスフォーメーション、さらにブロックチェーンや5Gの波がどう展開するかについて、意見が交わされた。

モデレーター



里見 治紀

セガサミーホールディングス
取締役社長 グループ COO

パネリスト



國光 宏尚

gumi
取締役 会長



吉田 真市

日本コロムビア
取締役 副会長



Session 分科会 企業経営の未来

分科会 4 - A

テーマ デジタルトランスフォーメーション

各社のデジタルトランスフォーメーション (DX) の取り組みや大企業とベンチャー企業の融合、データのマネタイズ、GAFAとの向き合い方など、話題は多岐にわたった。企業が取得した個人情報を利用する際の許諾問題にも話が及び、DXを進める上でのデータに対する感度についても重要性が指摘された。

パネリスト



寺田 親弘
Sansan
取締役社長



檜崎 浩一
SOMPOホールディングス
グループCDO執行役常務



程 近智
アクセント
相談役

モデレーター



鉢嶺 登
オプトホールディング
取締役社長グループCEO



分科会 4 - B

テーマ オープンイノベーション

組織の枠組みを超えて新たな技術やアイデアを集め、革新的な製品やビジネスモデルを生み出すオープンイノベーション。産業や社会の発展の原動力として大きな期待がかかるが、日本ではあまり進んでいない。その背景には日本の大企業独特の文化があるとも指摘されている。先進企業の取り組みや、海外、特にシリコンバレーの動向をパネリストに聞きながら、参加者も交えて、日本の産業界の課題を探った。

モデレーター



宇佐美 進典
CARTA HOLDINGS
取締役会長 (CEO)

パネリスト



伊佐山 元
WiL
General Partner & CEO



小柴 満信
JSR
取締役会長



分科会 4 - C

テーマ 働き方改革

「時短勤務」「有休取得の奨励」という視点に基づき、「やりがい」「社会貢献を実現する場」がキーファクターとなってきたとの指摘からスタート。法制度による縛りの現状にも触れつつ、「正社員」という雇用形態にこだわらない働き方、大企業を「場」として活用する働き方など、さまざまな「働き方」の可能性が議論された。



モデレーター



麻野 耕司
リンクアンドモチベーション
取締役

パネリスト



白石 徳生
ベネフィット・ワン
取締役社長



鈴木 純
帝人
取締役社長執行役員CEO

分科会 4 - D

テーマ AI・データの未来

AIの活用について、人手不足領域の支援、人ができない領域での事例、あるいは事業成長を支えるための仕組み化など、登壇者それぞれが実例を紹介するところから議論は始まった。ソフトウェアとしての性質や、活用する際のプリンシパルの重要性、また実装を後押しするための組織カルチャーのあり方など、多岐にわたる点から議論が進んだ。

パネリスト



上野山 勝也
PKSHA Technology
代表取締役



竹内 真
ビズリーチ
取締役 CPO兼CTO



渡部 一文
アマゾンジャパン
バイスプレジデント

モデレーター



佐藤 光紀
セブテニ・ホールディングス
取締役グループ社長執行役員



Closing Session クロージングセッション

鼎談 日本の未来 ～政治・経済・社会～

クロージングセッションでは、衆議院議員小泉進次郎氏を迎え、政治・経済・社会の未来を語る鼎談を行った。



左から、金丸、小泉、高島の3氏

登壇者

(肩書は9月9日時点)

小泉 進次郎

衆議院議員

金丸 恭文

経済同友会副代表幹事

日本の明日を考える研究会 委員長

高島 宏平

経済同友会幹事

負担増世代が考える社会保障改革委員会 委員長

鼎談要旨

大企業とベンチャー企業の連携は「橋」から「陸続き」を目指して

金丸 今日は第1回目でしたが、経済同友会の会員の皆さま、そしてスタートアップのベンチャー企業の方々が半々ぐらいの割合で参加してくださいました。ベンチャー企業の中にはすでにIPO(株式公開)をなさった方々もいます。あいにくの台風で午前中のプログラムを中止しましたが、想像していた以上に分科会の議論が深まっていたと思います。

高島 ベンチャー企業と大企業が一堂に会するのは実は非常に珍しいことです。政治の世界からみると「経済界」というものがあるように思われるかもしれませんが、実際は大企業経済界やスタートアップ経済界のように独立して存在しています。私も経済同友会に入会(2014年)したとき、まったく別世界、別言語のように感じました。島が二つあって、その間に島をつなぐ「金丸橋」があるように思います。金丸橋は大企業とベンチャー企業の他に政治との間にもあります。

小泉 金丸さんとは、私が自民党の農林部会長として農業改革に関わったときにご縁がありました。そのとき金丸さんは「気にしない力」といいますか、既成にとらわれず改革に切り込む力が高い方という印象を受けました。しかも、専門家以上に法律、ファクト、データが頭に入っています。

金丸 農業改革については、成功した先人がいないということが多少モチベーションになりましたが、難しいのは党内の取りまとめを誰がやるかということ。私は外から攻める役割を担当しましたが、中の取りまとめ役は小泉進次郎さんしかいないということで、引き受けていただきました。

小泉 稲田朋美政調会長(当時)から言われたときは、ジョークだと思いました。想定外でしたが、自民党の農林族の方々の理解を得たというので引き受けることにしました。

金丸 私は政府の規制改革推進会議のさまざまなテーマで議論しましたが、自民党の政策決定のメカニズムについて、

小泉さんはどう思われますか。

小泉 私の場合は、農林族の重鎮といわれた方の存在が大きかったですね。若い経営者の方も、社内で意思決定をするときには年上の方とのコミュニケーションや合意形成が重要になると思います。テクノロジーが速いスピードで進んでいると、理解や説明も大変になりますね。私も10代のデジタルネイティブ世代と話せば分からないことがたくさんあるでしょう。しかし、組織の中で世代を超えた合意形成が必要なときに、自分よりも何世代も上の方が「応援してやれよ」と押してくれたことで農業改革はまとまりました。自民党には合意形成プロセスが伝統として根付いていますが、テクノロジーなどを使ってさらに効率的な会議運営や合意形成を目指すという点では、まだまだ改善の余地があると感じています。

高島 経済同友会は個人の資格で参加をしているので会員同士は対等です。年長の方々が「若いから」と言って話を聞かないということはありません。先ほど金丸橋の話でしたが、橋が流れてしまうこともありました。ベンチャー企業と大企業が連携するのは簡単ではないでしょう。個人の資格で参加する経済同友会から連携を広めることで、橋というより陸続きを目指していくために、さらにコミュニケーションを増やしていくが必要になると思っています。

金丸 自民党でも部会ごとの朝食会など、いろいろな交流がありますね。今日のイベントをきっかけに、そのようなことをやっていこうと話しているところです。

日本が提唱、人生100年時代 SDGsの18番目の目標に

小泉 これから考えてもらいたいのは、民間の皆さんにもっと積極的に行政や政治とかかわってほしいということです。多くの民間団体から提言が出ますが、それを実現まで運ぶのは地味で報われないことが多く大変なことです。また法律にしていく作業は、どの言葉を選ぶのか、句読点をどこに打つのか、この言葉は削るけど、ここは絶対に譲らない

という作業がベースとなります。こうしたことは霞が関文学、永田町文学のようなものです。ここが分かると政治家を使えるのではないのでしょうか。

高島 われわれには難解ですから、オンライン講座などをやってほしいですね。

金丸 オンラインという言葉が出ましたが、例えば鹿児島県は大学進学率が32.2%で、離島が多いので物理的な障害もあり日本最下位です。医療の分野では、ますます高齢化して病院に通わなければならない人が増えます。それだけに、今後は対面がデフォルト（標準設定）ではなく、教育や医療ではオンラインをデフォルトにしたらいいのではないのでしょうか。

小泉 私は官僚から政策のレクチャーを受けるときに、オンラインレクチャーにしています。厚生労働省の中にオンラインでつながるボックスを置いて、そこから私の事務所のパソコンにつないでレクチャーを行うことで、役所の皆さんは私の事務所に来なくて済むようになり、事務所内の生産性も上がっています。

高島 オンラインの話ではありませんが、私が委員長を務める委員会で話していることをシェアします。社会保障関連の予算は、社会保険料を合わせると年間20兆円くらいです。この大きな額を費用から投資に変えられないかということ議論しています。サポートするだけではなくて、生産的なことをする人を生み出し、その人の生産的な時間を長くすることができないかということです。

雇用は非常に重要なテーマで、60歳まで働いていた人がその後も働いて社会保険料を払う世の中にならざるを得ない。そうすると学び直しが重要になる。米国のホルバートンスクールという事例があり、18歳から55歳ぐらいまでの人たちが学び直しに来る学費後払い型最先端プログラム大学です。卒業生はプログラマーとして超一流企業から引く手あまたで、その後、給料の17%を3年間、大学に後払いで戻す仕組みです。こういうことを経済同友会主体で動かせないかと思っています。

小泉 今年の5月に米国に行って人生100年時代のスピーチをしてきましたが、日本人が思っている以上に海外では驚きと興味を持たれます。100年単位で国民一人ひとりの生涯を設計しようと考えている国は、世界のどこにもありません。SDGsでは17の目標がありますが、人生100年時代は日



本提唱の18番目のゴールになるのではないのでしょうか。これは日本の売りになると思います。

高島 在職老齢年金制度についても考えています。長く働く際の逆インセンティブを取り払おうということです。

小泉 現行制度では、働きながら一定の収入があると年金は減ります。日本人の良さは勤勉さです。働いて収入があったら年金が減られるのでは、長く働くことに対するディスインセンティブです。私はこれをやめるべきだと言ってきました。今年6月の政府の「骨太の方針」に在職老齢年金制度を見直すという文言が入りました。批判もありますが、働いて収入があっても年金は減らされないというメッセージをシンプルに国民の皆さんにお伝えした方が、働くことに対するインセンティブになると思います。

高島 在職老齢年金制度はなくした方がいいと思いますが、基金のようなことができないかなとも考えます。基金にすることで、未来を担う次の世代への投資にしていける。例えば貧困家庭の子どもたちの高等教育に使えるようにするとか、ふるさと納税のようなイメージで、単に返上するのではなくて、次世代に贈るような形にできないかということです。

政治に無関心でいられるが 無関係でいることはできない

金丸 経済同友会は以前、政治家の皆さんと交流していましたが、官僚と交流した方が実務的ではということで、現在では例えば財務省や経済産業省の主要なキーパーソンと重要政策課題などについて意見交換する委員会を開催して、そこに会員の若い経営者の皆さんにも入っていただくような交流をしています。

高島 経済同友会はさまざまな合同カンパニーのプラットフォームになったらいいと思います。経済界と官界、医師、学界など、個人の資格で参加する会だけに、さまざまなコミュニティとの他流試合もやりやすいと思います。

金丸 政治家の人たちとでは、その人選が結構難しいです。自民党だと幹事長に頼むのか、政調会長に頼むのか、あるいは小泉さんに頼むのか。いろいろ違いが出ますね。

小泉 違いますね。でも、いずれにしても今日のような会を今後もやってほしいですね。政治に無関心でいることはできますが、無関係でいることはできません。少しでもいいから政治に関心を持ち、時間を使ってもらいたいです。



金丸 今日はスタートアップのベンチャーの経営者にも多く参加していただいています。こうした企業が成長しているときには業法や規制はあまり意識しないで済みます。しかし一定のところからさらにダイナミックに展開しようと思ったときには規制の壁に当たってしまう。そういう意味で経営者は本業の発展に注力するだけでなく、政界も含めて日ごろの交流をもっと続けた方がいいと思います。

高島 政治と経済の話で思うのは、領域がどんどん曖昧になっていく感じがあり、民間、地方自治体、国が入り乱れている。入り乱れてワニイシューを解ける人が解くというのは、むしろ新しいことなのかもしれません。イシューがあると非常に連携しやすい。

小泉 課題ドリブン（解決したい課題を最優先にして考え行動する）の関わり方ですね。例えば、富山県南砺市に行ったら、立派な常設ボルダリング施設がありました。以前国体の際に会場として造ったものだといいます。今ではアジア大会も開くそうです。ただし、宿泊施設はほとんどなくて、その代わりに公園のような場所で、世界から来た人たちがテントで寝泊まりをして、交流しています。宿泊施設不足を逆手に取った発想です。このように、政治や行政だけでなく、民間の皆さんがかかわったら解決できそうな問題がたくさんあると思います。

ベースコミュニティはどうか 「日本らしい日本」にするために

金丸 最後に、どのような日本にしたいか、これからの貢献やコミットメントについて一言お話しください。

高島 社会保障に関して、自助・共助・公助のうち共助の部分がどうなるかがとても重要だと思います。昔は大家族が



日本のベースコミュニティで、昭和の時代には、企業がそうでした。令和は何に拠って立つのか。オンラインなのかもしれないし、また別のコミュニティなのかもしれない。ここにいる皆さんと一緒に、令和らしいベースコミュニティを考えていきたいと思います。

金丸 私は基本的にオンラインデフォルトに注力しようかと思っています。共助は、CtoCの世界でした。ところが業法は元々BtoCを前提にしているから、CtoCにうまくはまらない。シェアリングエコノミーなど新マーケットも大きくなりません。共助のあり方もface to faceの共助と、例えばクラウドファンディングなど、遠く離れた人との共助があります。教育分野や医療分野なども、デジタルとオンラインで完結できる社会をつくり生産性を向上させることが、少子化、高齢化に最も貢献するのではないかと考えます。

小泉 私は最近、「日本らしい日本」という言葉をよく使います。人口減少が進む中で、それを嘆くのではなく強みに変えなければいけない。日本の強みである人工知能やロボット、省人化・省力化などのアクセルを徹底的に踏みたいと思っています。同時に人間の触れ合い、コミュニティ、自然や文化などの日本らしいものも、守っていかなければいけません。日本が変われるかどうかは、国民一人ひとりの行動が変化するかどうかにかかっています。

Lunch-session ランチセッション

テーブルごとに経済同友会会員がリード役となり、昼食を取りながら事業紹介や議論が行われた。



タイムスケジュール

※特別講演および「産業の未来1」分科会1は台風の影響により取りやめとなった

12:00 オープニングセッション

開会宣言 金丸 恭文 経済同友会副代表幹事・日本の明日を考える研究会 委員長／フューチャー 取締役会長兼社長 グループCEO
代表幹事挨拶 櫻田 謙悟 経済同友会代表幹事／SOMPOホールディングス グループCEO 取締役 代表執行役社長

12:15～13:15 ランチセッション

13:30～14:30 「産業の未来2」分科会2 →詳細はp07参照

2-A	テーマ 小売・流通の未来	2-B	テーマ 物流の未来 (シェアリングエコノミー)	2-C	テーマ 食・農業の未来	2-D	テーマ 金融の未来① (フィンテック)
-----	--------------	-----	----------------------------	-----	-------------	-----	------------------------

14:45～15:45 「産業の未来3」分科会3 →詳細はp08参照

3-A	テーマ 医療の未来	3-B	テーマ オフィスの未来	3-C	テーマ 金融の未来② (証券・運用)	3-D	テーマ コンテンツの未来
-----	-----------	-----	-------------	-----	-----------------------	-----	--------------

16:00～17:00 「企業経営の未来」分科会4 →詳細はp09参照

4-A	テーマ デジタルトランス フォーメーション	4-B	テーマ オープン イノベーション	4-C	テーマ 働き方改革	4-D	テーマ AI・データの未来
-----	--------------------------	-----	---------------------	-----	-----------	-----	---------------

17:15～18:20 クロージングセッション

鼎談 小泉 進次郎 衆議院議員
金丸 恭文 経済同友会副代表幹事・日本の明日を考える研究会 委員長／フューチャー 取締役会長兼社長 グループCEO
高島 宏平 経済同友会幹事・負担増世代が考える社会保障改革委員会 委員長／オイシックス・ラ・大地 取締役社長

18:35～20:30 ディナーパーティー

※取りやめとなったプログラム

オープニングセッション 特別講演 杉本 真樹 医師、医学博士／Holoeyes COO, Cofounder／帝京大学冲永総合研究所 特任教授

「産業の未来1」分科会1

1-A	テーマ	教育の未来	1-B	テーマ	製造業の未来 (IoT, AI)	1-C	テーマ	地方創生の未来	1-D	テーマ	メディアの未来
モデレーター 轟 麻衣子 ポビンス 取締役社長 パネリスト 富山 和彦 経営共創基盤 (IGPI) 取締役 CEO 山口 文洋 リクルート 執行役員 教育・学習事業担当			モデレーター 間下 直晃 ブイキューブ 取締役社長CEO パネリスト 出雲 充 ユーグレナ 取締役社長 島田 太郎 東芝 執行役常務 藤森 義明 日本オラル 取締役会長／LIXIL グループ 相談役／ CVCキャピタル・パートナーズジャパン 最高顧問			モデレーター 秋好 陽介 ランサーズ 取締役社長CEO パネリスト 東 良和 沖縄ツーリスト 取締役会長 米良 はるか READYFOR 取締役CEO 山野 智久 アソビュー 取締役社長			モデレーター 佐々木 紀彦 NewsPicks studios CEO NewsPicks 取締役 (新規事業担当) パネリスト 宮澤 弦 ヤフー 常務執行役員 メディアカンパニー長 吉田 慎一 テレビ朝日ホールディングス 取締役社長・COO		

Dinner-party ディナーパーティー

閉会挨拶終了後、立食形式によるパーティーを開催。
歓談しながら参加者同士のネットワークを広げ、交
流を深めた。



Closing Session クロージングセッション

閉会挨拶

日本の明日を考える研究会 副委員長 吉松 徹郎
アイスタイル 取締役社長兼CEO

私が「日本の明日を考える研究会」で副委員長としての活動を始めて、1年半ほどになります。私がこの研究会に声を掛けていただいたのは、若手が少ないからです。実際に約1,500人の会員がいる中、30代は6人しかいません、40代は100人ほどです。しかし、この20年間に於いて日本は、多くのスタートアップ企業と経営者を生み出しています。スタートアップの世界は明らかに様変わりしました。私が入会した時、経営者同士のつながりはあまりありませんでした。そうした中で、大企業とベンチャー企業の経営者の交流を進めようと、研究会で検討を重ねてスタートしたのが本日のラウンドテーブルです。

企画は研究会の田中良和副委員長、南委員長が中心になって進めてきました。これまでの経済同友会では、このような機会はなかなか実現できなかったと思います。先ほどの鼎談にもありましたように、大先輩方に認めていただき、また初めての試みのため、どのような内容かも分からない中、参加していただいた方々の善意により成り立つものと考えています。

初めての会ということではいろいろ不手際もあったかと思いますが、こうして皆さまの善意が積み重なっていくことで、世の中は少しずつ変わっていくはずで、10年後、20年後には、私たちが経済界の中心にいて、鼎談に登壇いただいた小泉衆議院議員のような若い政治家の方々と共に日本を変えていければと思っています。



日本の明日を考える研究会 委員 南 壮一郎
ラウンドテーブル2019 運営責任者
ビズリーチ 取締役社長

私は3年ほど前に、経済同友会に入会しましたが、その際、本会の歴史を調べました。戦後間もない1946年、日本経済を再建するために本会を創立した当時の幹事たちの平均年齢は45歳。何もない焼け野原を前に、どうすれば経済を復興できるのか、どうしたら社会がより良くなるのか、という想いの下、本会は生まれました。

また、国全体の生産性をどのように向上させるのか、企業の社会的責任をどう考えるか、国際競争にわが国はどう立ち向かうのかなど、時代背景に眠る課題と経営者の皆さまは共に向き合っていました。経済同友会に入会して、日本経済について真剣に考えている経営者の先輩たちが数多くいることに驚きました。

そして、自分の周りには、日本の未来を創っていこうという志を持った同世代の経営者の仲間たちも大勢います。それならば、世代を超えて共に日本の明日を一緒に盛り上げていきたい、その想いがまさに本日のラウンドテーブル2019の開催につながりました。

本日参加された皆さんは、経済同友会の新たな歴史の1ページをめくった同志です。ぜひこれからも、若手、ベテラン、企業規模の大小、歴史の新旧を問わず、経営者同士で肩を組み、日本の明日を共に支えていきましょう。本日はご参加いただき、誠にありがとうございました。



記者会見

閉会后、金丸恭文委員長、間下直晃副委員長、橋本圭一郎副代表幹事・専務理事が記者会見を行い、経営者同士が日本の産業の未来を語り合うことができたことと総括した。

●金丸委員長コメント

分科会では「未来を語る」という視点で、12のテーマで議論を交わしましたが、最後の鼎談はオープンにしましたが、分科会は非公開で実施しました。カジュアルな雰囲気の中で、熱心な議論が行われ、ご参加いただいた方々にも満足いただけたのではないかと思います。相当にクオリティーの高い本質

的な議論も交わされました。内容については今後、整理して発信していく予定でいます。

●間下副委員長コメント

最初の開催でもあり、分科会は非公開としました。閉じた状態だからこそ、自由に議論ができた面もあり、かなり踏み込んだ内容になったと思います。

大企業とスタートアップ企業では、言語も違えば感覚も違いますが、意外と同じだということに気付いたこともあったと思います。今後このような場を少しずつ進化させていったり、今回のような形式以外でも、さまざまな取り組みを推進することで、経済団体の中でも経済同友会らしいユニークな活動ができるのではないかと思います。

